

市民と市長との対話集会会議録【要旨】

※生成 AI による要約を行なっています。

令和7年5月13日 中津川市ボランティア連絡協議会

会長

我々は比較的高齢であるが、我々なりのボランティア活動をしたい。中津川市にはそれを育成してほしいという思いから、市長との接点を持とうと今回の対話集会を計画した。市長が市民との交流の場を持つ中で、我々も市長の考えを取り入れながらボランティア活動を進めていきたい。

市長

対話集会は、市民のさまざまな意見を聞くため昨年4月から始め、今日で36回目になる。ボランティア連絡協議会の皆さんの活動に感謝し、社会福祉協議会の取りまとめにも感謝している。ボランティア活動の窓口は活動内容によって市役所の担当部署が異なるため、社会福祉協議会のまとめ役は大変ありがたい。市内各地で多くのボランティアが活動しており、市民が助けられていることを実感している。今日は皆さんの活動を聞き、中津川市と市民がより良くなるための話ができればと思う。

司会

お手元の資料は2019年にまとめた「地域の活性化対策の一提案」です。15年前は60歳定年で、退職後ボランティア活動をしたい人が多かったが、機会がなかったり、方法が分からなかったりした。社会福祉協議会はボランティア養成講座を開催し活動を促進したが、行政側は行財政改革と言いながら、職員の理解は進まなかった。ボランティア希望者との効果的なマッチングができていなかった。

現在は、退職後のボランティア意識が低下し、企業のボランティア推進も減少。社会福祉協議会の啓発活動も集まりにくい状況。行政の姿勢もほとんど変わっていない。

提案としては、①少なくなるボランティアの連携強化、②社会福祉協議会または行政が中心となるボランティア専用窓口の設置、③ボランティア団体の事務局的な取りまとめ、④行政主導のボランティア活動の推進。

ボランティア連絡協議会自体も存続が危ぶまれており、役員の成り手がいない。こうした連携を図る取り組みがボランティア活動の推進につながり、限られた予算で効果的なサービス提供ができるのではないかなと思う。

参加者

手話サークルでは年に12回の手話講座を昼と夜に開催しているが、講座終了後もサークルに残るといふ人は少なく、会員が増えない。今年11月に東京でデフリ

ンピックが、中津川市で岐阜県聴覚障害者協会主催の手話まつりが開催されるので、これを機に聞こえないことや手話について知ってもらいたい。

また、従来は行政がすべきことをボランティアが請負事業のように行い、横のつながりも持てなかった。これからは横のつながりを持ち、ボランティア連絡協議会として力を結集していく必要がある。

市長

皆さん共通する課題だと思うが、新しいメンバーを増やすことが重要。手話は存在は知られていても、実際にどういうものかわからない人が多い。体験して興味を持つ機会をたくさん作ることが大事だと思う。

参加者

以前は健康福祉まつりがあり、点字で名刺を作るなど、さまざまな体験を通して興味を持ってもらう機会があった。しかし、コロナの影響でなくなり、大勢が集まる機会が途絶えた。一般の方が参加しやすい形の行事があると広がるのではないかなと思う。

司会

ボランティア団体が集まるお祭りのような場があれば交流が深まると思う。ボランティア連絡協議会もさまざまな団体に働きかけているが、各団体自体が存続の危機にあり難しい。手話関係の方に防災士の公民館講座で災害時の対応について勉強会をしてもらい、とても良かった。こうした連携はボランティア連絡協議会のつながりがあってこそ。

問題は行政が縦割りになっていること。市の組織改革は縦割り行政からシステム化への移行だと思う。ボランティアも同様に、福祉ボランティアは社会福祉協議会が束ねるが、それ以外のボランティアは縦割りのまま。ボランティア組織のシステム化ができれば活性化につながる。まずは現状分析から始めるべき。ボランティア活動者は本来さまざまなことをやりたい人たちなので、その活用が重要。

参加者

社会福祉協議会は専門的なことを勉強しているが、市役所は人事異動があるため専門分野から外れる。今年の公民館の人事異動でも利用者が戸惑っている。市職員も専門的なことを求められ大変だと思う。

市長

中津川市には多くのボランティア団体があり、多くの市民がその活動によって助けられている。ボランティア団体を紹介するような仕組みがあるといい。まずは団体の存在を知ってもらう場が必要だ。他のイベントと組み合わせる方法が考えられる。

参加者

市立図書館の委託を受けて音訳図書も作成し図書館に置いている。点訳の展示も置いているが、健常者も含め多くの人がある存在を知らない。

参加者

点字本も作って図書館に寄贈しているが、それを知らせようとしても市は個人情報理由を断る。視覚障がい者を守ることも大切だが、サービスの存在を知らせることも重要。

司会

良いサービスがあるのに利用されないのは残念。お金がかかる話ではないので、話し合いの場があればもう少し進展するのではないかと。これこそシステム的な構造が必要。

市長

実態を十分把握していないが、サービスと求める方のマッチングは重要。個人情報の問題はありますが、つながることは可能だと思う。災害時を考えると、地域で障がい者の存在を把握することが重要。障がい者をオープンにしたい人もいますが、市は把握していても地域では知らないというケースもある。市と地域の連携をもっと進める必要がある。市がどこまで点訳を求める人を把握しているか疑問だが、つながることは難しくなく、やり方の問題だと思うので考えていきたい。

参加者

児童養護施設では、子どもと1対1で関わるにはボランティアが足りない。去年は坂本の民生委員に声をかけて見学してもらい協力を得たが、どう広げていくべきか、人をどう集めるか困っている。

司会

防災関係住民と行政の間には溝がある。その間に入ってボランティア団体が住民目線と行政目線の良いところを組み合わせる仕組みづくりができるといい。

参加者

数年前に東美濃ふれあいセンターであった健康フェスティバルには、さまざまな団体が出展し、1日かけてじっくり見られる場所があった。多くのボランティアの活動を知る発見があり、またそういう場があれば、団体の広報になり、知らない人が知るきっかけになるのではないかと思う。

市長

すぐに人が集まるわけではないが、種まきをしていくことが大事だ。社会福祉協議会と打ち合わせし、市も連携してさまざまなボランティアを巻き込む方法を考えたい。最初から大きなことをすると続かないので、できることから検討したい。

参加者

ボランティアセンターのような場所があればそこで活動することもでき、一般の方も来られて広がっていくことがあるのではないか。

司会

今後の人事や組織の中でボランティアについても考えていただきたい。ボランティアを活用し、住民と行政の間をうまく連携する位置づけになるよう考えていただければと思う。ありがとうございました。

市長

貴重な時間をいただきありがとうございました。皆さんの活動が市民の助けになっていることが伝わってきた。ボランティア団体同士の横のつながりも必要だと感じた。ボランティア連絡協議会という形でつながっているが、他にももっと多くのボランティア団体がある。市役所だけでは市民サービスが行き届かない中、社会福祉協議会や皆さんの活動は不可欠。ボランティア団体が継続することは、頼りにしている市民にとっても重要なので、それをサポートできるようにしたいと思う。